日本人中医診療記
その３

天津中医薬大学　**柴山周乃**

天津は日本のように梅雨がなく，早くも日差しの強い夏がやってきました。７月中旬過ぎには湿度も高くなりますが，それまでは空気はかなり乾燥し，じりじりと肌が焦げつきそうな日差しです。街ゆく女性たちは，つばの広い帽子，サングラスに，二の腕までの長い手袋，と完全装備です。

私はCA時代は，乾燥する機内環境や時差のせいでいつも目を充血させながらフライトしていましたが，退職してからはそれも随分おさまっていました。ところが，ここ１年ほど，しっかり睡眠を取ったあとも目が充血しているため，帰国した際に東京の眼科で診察を受けました。「重症のドライアイ」との診断を受け，それ以来，ソフトサンティア®とヒアレイン®を使用していますが，なかなかすっきりしません。そんななか，シェーグレン症候群の患者さまが診察に来られた際，張伯礼学長は弁証のあと，おもに滋陰剤の中薬を処方し，さらに，菊花と枸杞子をお湯に入れ，１日数回お茶代わりに飲むようアドバイスしました。私も早速実行し，飲むことほぼ２カ月，かなり目の濁りがなくなってきました。

菊花には貢菊と杭菊の２種類あり，効能はほぼ同じですが，貢菊は平肝明目，杭菊は疏散風熱の効能が強いため，私は貢菊を選び，枸杞子とキッチンで育てているハーブミント（薄荷）を合わせ，診察や講義の合間にできるだけ飲んでいます。ホットフラッシュを訴える知人に勧めたところ，彼女も２カ月で嘘のように楽になったと言っています。疏散風熱・平肝明目の菊花，滋補肝腎・益精明目の

枸杞子，そして疏散風熱・清利頭目・疏肝行気の薄荷，これらは理にかなっていると思います。ただ，菊花の薬性は苦寒ですので，冷え症・胃腸虚弱の方は注意したほうがいいかもしれません。

さて，今回は中国の中薬についてお話させていただきます。おもに，中国の中医学で特徴的な飲片（生薬）と中成薬，そして中薬注射薬についてご紹介します。

①飲片（生薬）

中国では中医病院はもちろん，一部の西医病院でも生薬を処方しています。天津中医薬大学第一付属病院を例にしますと，生薬調剤室には常に800種余の生薬があり，そのうち甘草・丹参・白朮・茯苓・当帰・黄耆など約300種の生薬がよく使われています。生薬の利点はなんと言っても，弁証し，個々の患者さまに合った処方ができるということです。いわゆるオーダーメイドの処方です。ほとんどの方は自分で生薬を煎じますが，患者さまの負担軽減のため，代行の煎薬を行っています。真空パック包装（1パック：1回分，150mL）のため，服用前にそのまま湯煎にして服用でき，とても便利で，暑い夏場は特に代煎希望者が多いようです。また，病状が安定している患者さまには，希望に応じて処方薬を丸剤（蜜丸・水丸）や散剤に加工することもできます。各生薬の顆粒剤（エキス剤）もあり，お湯に溶かすだけの利便性が好評を得ています。

代煎生薬

煎薬機

問題点

生薬価格の高騰。原因については，気候，投機売買，そして生産性が低いとの理由で生薬生産農家が減少，の３つがあげられています。ここ数年，太子参・金銀花・麦門冬・白朮など比較的よく使われる生薬の価格が高騰しています。今年５月 17 日の中国中薬協会の発表によりますと，常用される 537 種類の生薬のうち，昨年の同時期に比べ価格上昇しているものは 371 種類（約 69%），なかでも太子参・白前・土竜歯・五加皮の値上がり幅が大きく，最高 400%値上がりしているものもあります。患者さまの経済的負担を減らすため，高価な金銀花に替えて比較的低価で同じ清熱解毒の効能がある蒲公英や野菊花を処方するなど，処方に工夫を凝らす医師もいます。

②中成薬

日本でもすっかり馴染みの深い中成薬。日本では張仲景処方の中成薬が多いようですが，中国の中成薬は代表的古代方剤や，中医師により研究発明された経験処方が使いやすく製剤化されています。病院では，病状が比較的安定した患者さまに処方しています。中成薬には三七片・黄耆顆粒・板藍根顆粒のように１種類の生薬を製剤化した単味中成薬と，多種類の生薬を配合し製剤化した複方中成薬があります。中成薬は解表薬・清熱薬・瀉下薬・治燥薬・補益薬など 20 種類あり，内用薬では錠剤･丸薬･粉末剤･カプセル剤･吸入剤，外用薬では軟膏・塗薬・ローション・貼り薬・目薬などがあります。中国の中成薬には国家薬品監督管理局の認可を受け，全国の薬局や病院で購入できるものと，各省・自治区・直轄市の薬品監督管理局の認可を受けた院内製剤があります。院内製剤は，認可を受けたその病院でしか処方・購入できません*[1]。中成薬は種類も豊富で品質も安定しており，携帯にも便利，手軽で飲みやすいとの理由で好ま

中薬パック

中薬注射剤

れる方が多いようです。私は，今，循環器外来で診察にあたっていますが，心絞痛（狭心症）の患者さまのほとんどが，ファーストチョイスとして，ニトログリセリンではなく速攻救心丸または複方丹参滴丸を舌下服用し，病状は緩和されています。また，藿香正気水は，中暑（暑気あたり）に中国でよく使われている中成薬ですが，これからの季節，なかなか手に入りにくくなります。ちょっと飲みにくい中成薬ですが，効き目は抜群です。

問題点

便利な中成薬は服用人口も増えていますが，いくつか問題点もあります。1．中成薬説明書：①薬理メカニズムの説明不足，②副作用の報告欠如，③有効期限のあいまいさ。2．副作用：比較的安全といわれている中成薬ですが，消化器系統や循環器系統の副作用，肝および腎臓の損傷，そして変態反応（発熱や薬疹）などが現れます。3．弁証論治：既製の中成薬では中医学の特徴である弁証論治を完璧にすることができず，個別に細かい対応ができません。例えば，舌苔膩の虚証の患者さまに単純に補益の中成薬を処方すれば，湿が重症化してしまいます。中成薬を処方する際にも，しっかりとした弁証は欠かせません。

③中薬注射薬

中薬注射薬は生薬の有効成分を抽出し，現代科学技術により精製した注射薬で，中国では1930年代に「柴胡注射薬」が研究精製され，感冒・発熱などの治療に使用されていました。中薬注射薬には筋肉注射，穴位注射（針灸科で使用），静脈注射と静脈点滴薬があります。中成薬と同じく，1種類の生薬を精製した単方注射液（葛根素・刺五加・丹参・当帰・魚醒草素など）と，多種の生薬を配合精製した複方注射液（双黄連・当帰紅花・複方丹参・清開霊など）があります。私は修士課程のときに循環器病棟で3年間学んでいましたが，清熱・活血化瘀の効能のある中薬点滴薬がよく使用され，高い治療効果を得ていました。中薬注射薬は中医病院だけではなく，一部の西医病院でも臨床で使用されています。

問題点

臨床で効果を上げている中薬注射薬ですが，最近では，安全性・使用方法がかなり問題視されています。1．安全性：①中薬注射薬

の滅菌の問題，精製過程での不純物混入。②副作用：アレルギー反応，消化器・神経・呼吸器・循環器系統の副作用の出現。２．使用方法：①弁証欠如による中薬注射薬処方事故。②ほかの薬剤（西薬）との併用による事故[*2]。以上の理由から，中薬注射薬は臨床で確実に効果があるものの，安全性の問題が大きく取りざたされており，使用するにあたり細心の注意が必要となっています。

中国の中成薬は，なかなか世界の表舞台に出られませんが，天津・天士力集団が生産している複方丹参滴丸は，中国の中成薬としてはじめて米国 FDA の第２ステージ臨床試験をクリアしました。今年３月末，私どもの大学で複方丹参滴丸の研究開発者でもある天士力集団・閆希軍会長のレクチャーがあり，米国 FDA の第２ステージ臨床試験クリアまでの経過が報告されました。次のステップ，第３ステージ終了まで 10 年前後かかるかもしれませんが，中国ではじめてのアメリカ進出の中成薬になる可能性もあり，とても期待されています。

東日本大震災後，はじめて迎える夏。今年は厳しい節電を余儀なくされると思います。猛暑が予想されていますが，皆さま，暑さ負けされませんよう，どうぞお元気でお過ごしくださいませ。

＊１　同じ天津中医薬大学系列の付属病院であっても，第一付属病院の院内製剤は第二付属病院では処方，購入できません。

＊２　中薬注射薬の成分は複雑であり，ほかの薬物と併用することにより，注射液の ph 値，透明度が変化，また沈殿物が発生。

プロフィール
柴山周乃（しばやま・ちかの）
愛知県名古屋市出身
1996 年 日本航空株式会社・国際客室乗員部退社
1999 年 天津中医学院（現天津中医薬大学）本科入学
2006 年 中華人民共和国・中医医師資格取得
2010 年７月 天津中医薬大学・中医内科学博士課程卒業
修士課程は天津中医薬大学第二付属病院・循環器内科杜武勲教授に師事，「糖尿病性心疾患の中医病機メカニズム及び臨床治療」を研究。
博士課程は天津中医薬大学・張伯礼学長に師事，「中医および漢方医学による心疾患･脳血管疾患治療」を研究。
現在は，引き続き張伯礼学長に師事し外来で診察および中国人学生の講義を担当。